

第15回 夏期福音特別集会（1）

「万象帰主」

——エペソ書第1章——

1968年8月23日（鹿沢）

小池辰雄

活火山 使徒的信仰に立ち帰る 初めの愛 キリストに酔える人 十字架の贖い 御意の奥義
万象帰主 聖霊の人 聖霊にて印せられた 我は十字架に投げ出されてあり 永遠の生命 死
んでも死なない生命 霊界の王者 私はリンゴの苗を植える 時が来たら私はやるぞ 我とキ
リストとは一つなり 平伏しの空っぱ 一と全

【エペソ1】

1 神の御意によりてキリスト・イエスの使徒となれるパウロ、書をエペソ
に居る聖徒、キリストに在りて忠実なる者に贈る。2 願わくは我らの父なる
神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と汝らに在らんことを。
3 讃むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、かれはキリストに
由りて霊のもろもろの祝福をもて天の処にて我らを祝し、4 御前にて潔く瑕
なからしめん為に、世の創の前より我等をキリストの中に選び、5 御意のま
まにイエス・キリストに由り愛をもて己が子となさんことを定め給えり。
6 是その愛しみ給う者によりて我らに賜いたる恩恵の栄光に誉あらん為なり。
7 我らは彼にありて恩恵の富に随い、その血によりて贖罪、すなわち罪の赦
を得たり。8 神は我らに諸般の智慧と聡明とを与えてその恩恵を充しめ、9 御
意の奥義を御意のままに示し給えり。10 即ち時満ちて経綸にしたがい、天に
在るもの、地にあるものを悉くキリストに在りて一つに帰せしめ給う。こ
れ自ら定め給いし所なり。11 我らは凡ての事を御意の思慮のままに行いたも
う者の御旨によりて預じめ定められ、キリストに在りて神の産業と為られた
り。12 これ夙よりキリストに希望を置きし我らが神の栄光の誉とならん為
なり。13 汝等もキリストに在りて真の言、すなわち汝らの救の福音をきき、
彼を信じて約束の聖霊にて印せられたり。14 これは我らが受くべき嗣業の保
証にして、神に属けるものの贖われ、かつ神の栄光に誉あらん為なり。
15 この故に我も汝らが主イエスに対する信仰と凡ての聖徒に対する愛とを
聞きて、16 絶えず汝らのために感謝し、わが祈のうちに汝らを憶え、17 我らの
主イエス・キリストの神、栄光の父、なんじらに智慧と黙示との霊を与えて、
神を知らしめ、18 汝らの心の眼を明かにし、神の召にかかわる望と、聖徒に



ある神の嗣業の栄光の富と、¹⁹神の^{いきおい}大能の^{はたらき}勢威の活動によりて信ずる我らに
対する^{ちから}能力の極めて大なることを知らしめ給わんことを願う。²⁰神はその大能
をキリストのうちに働かせて、之を死人の中より甦えらせ、天の所にて己の
右に坐せしめ、²¹もろもろの^{まつりごと}政治・権威・能力・支配、また^{ただ}當に此の世のみ
ならず、来んとする世にも称うる凡ての名の上に置き、²²万の物^{よろず}をその足
の下に服わせ、彼を万の物の上に^{かしら}首として教会に与え給えり。²³この教会は
^{からだ}彼の体にして、万の物をもて万の物に満し給う者の満つる所なり。

●活火山

我々の今度の集会というものは、私たちは歴史的なカイロスに立つておりまして、20世紀の今は1968年、これからあと30年しか20世紀はありませんが、この30年間に何が起きるか知らん。とにかく、世界の様相はただならないものを感じさせている。また、世界の学生がいろいろな動きを始めている。そういった現実を直視しまして、このキリスト教がもういい加減なキリスト教では、これを本当に乗り切ることができない。

私たちは、どのようなことになりました、それを乗り切るクリスチャンでなければならぬ。エペソ書でもパウロが、

「空中を^{つかさ}司どる権、そういった霊と私たちは戦うのだ」

と言う。ここでもって我々はいわゆる平和ではない。

「我は^{つるぎ}剣を投ぜんために来た」

とキリストは言われた。天来の剣、霊剣です。また、

「火を投ぜんがために来た」

と言われた。

この浅間山は活火山であります。その活火山の証明はいずこにあるか。我々がつかっている温泉にある。ここになぜ温泉が出ているか。それはその地底に火があるから。この浅間の懐、火山の懐のごとき所に私たちは今——本当に深山幽谷、谷川の流れる所——こういう火山の懐の中にとつぷりとつかつて、私は実は一週間くらいここに居たいと思うくらいです。あなた方もせつかく来て、二泊くらいで帰ったのでは、惜しいなと思う。どうぞ、この二泊をして一週間の実質をもたしていただきたい。そういう集会であります。これは本当に何ものかを得て帰らなければ——いや、得てではない——何ものかに化して帰らなければいかん。

そういうことであります。なんと楽しいか。非常に楽しく、また真剣勝負である。そういう集会に私たちは臨んでいる。あなた方一人びとりは非常な責任を負わせられ、また非常な栄光を約束されている。そういう一人びとりであります。本ものは小さな群れから始まる。どうぞ、このいと小さき群れは、



「汝ら、恐るるなかれ。父は汝ら、この小さき群れに神の国を賜ろうとして
いる」

と、ルカ伝にあるとおりであります。

どのような事態がきても、それを乗り切り得るところのものは何か。そのようなクリスチャンにならなかつたら、もうクリスチャンなんてよした方がいい。もうレット・クリスチャンだの、似て非なるクリスチャンだの、観念クリスチャンだの、そんなものは我々とは縁なきことであります。どうぞ、そういうことで、このエペソ書に立ち向かう。私はなにか、腹の中、胸の中に澎湃^{ほうはい}として言葉になりそうもないような気がいたします。

まあ、順序として多少、導入的なことも言いますけれども。このエペソ、ピリピ、コロサイという三つの書簡。特にこのエペソ書はコロサイ書と内容的に非常に似ておりますが。ちょうど、ピリピがその橋渡しみたいなもので、これは三部曲です。このエペソ、ピリピ、コロサイという三つの書簡は離すことができない。これはパウロの一番、ある意味においては、最高と言ってもいいかもしれない。ローマ書は、それは大きな建物かもしれないけれども。このエペソ、ピリピ、コロサイというのは、ちょうどベートーベン^{ベートーベン}の終りの方のクワルテットみたいなものだ。第九シンフォニーはローマ書でしょうけれども。そういう、何という凄^{すごい}い言葉だろう。解釈も何もできやしない。ただじつと見ていて、この言葉はどうにもならんです。

「エペソ書はパウロの書簡だろうか、どうだろうか」なんて、一番最初にそういうくだらないことを言ったのはシュライエル・マッハーだ。それはどうでもいい。とにかく、私は、この三つの書簡は獄中書簡でパウロが書いたに相違ないと思えない。あの御霊の充滿した男が——何というか——書いたのだから、筆が動いてしまったのか知らんという、そういう文字です。学者の言っていることを今ここで私はいろいろ紹介することは、いわゆる研究会ではないから、やめます。

●使徒的信仰に立ち帰る

エペソ書が大体まず、エペソとどういう関係があるかは、どうしたって使徒行伝を見ないといかん。使徒行伝19章。パウロの第三次伝道のところで、パウロはこのエペソに2年半ばかりいた。大体、紀元53年の秋頃から56年の正月くらいまで居たろうということです。第三次伝道のところが使徒行伝18章24節から始まる。そこにアポロという、ちょっと別な伝道者がいまして、なかなか立派な伝道者で熱心な人だけれども、大事なものをひとつ忘れていた。19章に行きまして、

「^{かく}斯てアポロ、コリントに居りし時、パウロ東の地方を経てエペソに到り、

パウロは、多少、山岳の方から来た。エペソというのは小アジア半島の西の海岸寄りの所です。今は少し海から遠ざかっているが、そのころは本当に海沿いの港だったというのはな



しです。

或る弟子たちに逢いて、²『なんじら信者となりしとき聖霊を受けしか』と言いたれば、彼等いう『いな、我らは聖霊の有ることすら聞かず』。³パウロ言う『されば何によりてバプテスマを受けしか』彼等いう『ヨハネのバプテスマなり』。⁴パウロ言う『ヨハネは悔改のバプテスマを授けて己に後れて来るもの(即ちイエス)を信すべきことを民に云えるなり』。⁵彼等これを聞きて主イエスの名によりてバプテスマを受く。⁶パウロ手を彼らの上に按おきしとき、

按手したわけです。

聖霊その上に臨みたれば、彼ら異言を語り、かつ預言せり。⁷この人々は凡て十二人ほどなり。』(使徒18・1〜7)

と書いてある。パウロは即ち、御霊をもつてハッキリと証のできるどころの伝道者であります。アポロは実は、いわゆる観念伝道者である。一般の神学者とか牧師さんたちというのはこのアポロ式なのが多いわけです。「聖書、聖書。キリスト教、キリスト教」と言いながら、このパウロ的な質を持った伝道者が極めて今は少なくなってしまうている。それで、

「私たちは本当に使徒的信仰に立ち帰ろうではないか。この使徒的信仰に立ち帰ら

ないで何の福音であるか」

というわけであります。

それからあとはずっと凄いことが書いてありまして、

「¹⁰斯すること二年の間なりしかば、アジヤに住む者は、ユダヤ人もギリシヤ人もみな主の言を聞けり。¹¹而して神はパウロの手によりて尋常ならぬ能力ある業を行いたもう。¹²即ち人々かれの身より或は手拭あるいは前垂まえだれをとりて病める者に著つくれば、病やまいは去り悪霊は出でたり。」(使徒19・10〜12)

と、おそるべきことが書いてある。まあ何という人だろう。ある時は、毒蛇に咬まれても、彼は毒が回らなかつたという。土人が、「これは人間ではない。神さまだ」と言つて拝もうとしたらパウロは、「そんなことはするな」と。

パウロも、ペテロも、ヨハネも、もの凄いものをいただいてましたが、彼らは決してそれを私してはいません。自分をいわゆる霊的一流とは考えていない。使徒たちの伝道というのは、聖霊と御言とは絶対に切り離すことのできない伝道であります。彼らの発する言葉は聖霊によつて発せられている言葉である。頭で考え出されたところの言葉ではない。註解書を読んで、それを説明しているような言葉でもない。そういう霊と言とは、実にキリスト自身が言われたじゃないですか、

「私の言葉は霊だよ、生命だよ」

と。パウロさんも、ペテロさんも、ヨハネさんも、



「私が語らせられている言葉は霊だよ、生命だよ」

ということであります。形容しているのではない。本当にそうなんです。私は言いました、

「聖書には形容詞はありません。全部これは、文法的形容詞があったって、形容詞なんてものではない。みんなこれは本ものです。まだまだ、その本当の現実はい切れないで困っているというはなしだ」

と。そういうパウロは、特にエペソには非常に長く滞在していたということがこの19章に書いてある。そして、力強い伝道をまず、第三次伝道の初っぱなにこの小アジアのエペソで行った。エペソというのはギリシアとの交通の要衝ようしゅうの、当時の第一流の都会です。しかも、文化的にまた宗教的に——そのすぐあとに出てくるところの「アルテミス」という神があって、アルテミスの偶像が祀られている。これは紀元前4世紀くらいからのなしですけども。それでどうのこうのということが書いてあるでしょ——このアルテミス偶像神との戦いがそこに大いにあったわけです。

●初めの愛

エペソでもうひとつ、私たちがすぐ思い出さなくてはならないのは、黙示録2章の一番先に七つの教会に当たったところの私信がある。1章19節に、

「¹⁹されば汝が見しことと、今あることと、後に成らんとする事とを録せ^{しる}。」

²⁰即ち汝が見しところの我が右の手にある七つの星と七つの金の燈台との奥義なり。七つの星は七つの教会の使にして、七つの燈台は七つの教会なり。」(黙

示録1・19、20)

とある。これは使徒ヨハネがパトモスで示されたところの顕示、「アポカリユプシス」——「黙示」と言うよりもむしろ「顕示」と言った方がいい——の第一に出てくるのがこのエペソです。2章に、

「エペソに在る教会の使^{つかい}に書きおくれ。」

と。エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオデキヤという七つの教会が畳みかけて、3章の終りまでこの私信を受けるわけです。これはみんな小アジアにあるところの、ほとんどあの七つ星みたいに、密集しているような教会です。その筆頭にくるのがこの代表的なエペソ。そこで、エペソの教会に何を言われたかという

右の手に七つの星を持つ者、七つの金の燈台の間に歩むもの斯く言う、²われ汝の行為^{おこない}と労と忍耐とを知る。また汝が悪しき者を忍び得ざることと、自ら使徒と称えて使徒にあらぬ者どもを試みて、その虚偽^{いつはり}なるを見あらわししこととを知る。³なんじは忍耐を保ち、我が名のために忍びて倦^うまざりき。

結構なことだと。

⁴然れど我なんじに責むべき所あり、なんじは初^{はじめ}の愛を離れたり。



キリストの初めの愛を離れたら大変だ。

5 然れば、なんじ何処より墮ちしかを思え、悔改めて初の行為をなせ、然らずして若し悔改めずば、我なんじに到り、汝の燈台をその処より取除かん。6 然れど汝に取るべき所あり、汝はニコライ宗の行為を憎む、我も之を憎むなり。7 耳ある者は御霊の諸教会に言い給うことを聴くべし、勝を得る者には、われ神のパラダイスに在る生命の樹の実を食うことを許さん』(黙示録2:1-7)

「初めの愛」というのはまた、終りの愛でもある。私はそれを「終末的な愛」(エスカトロ・ギッシェ・リーベ)と言いたいんですが。キリストの愛は、初めであると同時にこの終末的な愛である。

そういうわけで、エペソというのは非常に代表的な小アジアの教会で、エペソの教会に、

1 神の御意によりてキリスト・イエスの使徒となれるパウロ、書をエペソに居る聖徒、キリストに在りて忠実なる者に贈る。2 願わくは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と汝らに在らんことを。

というのは、これをエペソに与えたが、しかし、エペソは代表的なので、それからこの書簡は多分、回書として回されたりということや学者も想像しているが、あるいはしからん。非常に代表的に語っているところの書簡です。これが書かれたのは大体、紀元62〜63年頃に多分、ローマで書かれたか、あるいはエペソで書かれたか、それは分からんというのですが。多分、ローマだろうと私は思います。これは囚われの書簡ですから。

●キリストに酔える人

私はこの第1章を読んでいて、「キリスト」という言葉にたくさんつくわす。非常に出てくる。なんとパウロという人はキリストに酔える人か。彼はキリストに酔える人である。キリストは神に酔えるひとである。キリストは神に酔えるひと、父なる神に酔っているひとであるが、我々はパウロのごとくキリストに酔える者。旧約の預言者エレミヤは、

「エホバの神の言に酔った。酒に酔えるがごとく汝の言に酔ってしまった」という言葉がある。

「朝も昼も、晩も寝ても、神でなければ」

というのがキリストである。私たちもキリストに酔っている。

しかしながら、いいですか、酔い方がある。酔い方をまちがえては困る。

「私は酔ってしまったら、三昧になって、もうこの世のことは何もしないで、会社もすっぱかしてしまつて、山の中で祈つてばかり」

なんて、そんな酔い方はダメなんだ。会社にあるうが、どこにあるうが、本当にキリストに酔っているという、そういう酔い方はどういう酔い方かというわけですよ。



3 讃むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、かれはキリストに
由りて霊のもろもろの祝福をもて天の処にて我らを祝し、

と。神さまはキリストによつて私たちをどこで祝福するかというと、「天の処」で祝福した。地かと思つたら、「天の処にて我らを祝し」という。私たちのこの現実はあるほど地です。地ではあるが、天という彼岸をこの此岸にしてしまつて、パウロはもう、天も地も一つになつたように、

「御意の天に成るごとく地にも成らせたまえ」

と、天を地にくだしている。天と地がもう接しているところの、いや実にそこに交わつているところの世界。天地の交わつているところの世界が、パウロのこの霊の現実であります。私たちは地上を歩いているが、天界を歩いているようなひとである。そういうことですよ。

4 御前にて潔く暇なからしめん為に、世の創の前より我等をキリストの中に
選び、

まあなんという凄いことを言うだろうか。まだ生れないさきですよ。「世の創の前」というのだから。「はじめのさき」とは何かと。「我等をキリストの中に選び」と、そういう選び方があるですか。

「生れぬ前に私は選ばれていた」

なんてなことをエレミヤも言つていたから。どういふことでしょうね。

それは考えたつて分からない。それはカルビンの「予定説」とかいふことかもしれないけれども。我々が何かであるから神さまは選んだのではなくて、もう初めからそのように、神の側からは計画づけられている。手続き付けられている。本当にキリストに選ばれて救われるというと、いやもう自分の救いというものは自分の側の何ものでもない。実は救われないことばかりなんだ、自分を見ると。この救われそうもないやつが救われたというならば、どうしたつてそれは、私が出てきてからでは、「出てきてから、さあお前をどうしようか」なんていうのではわからない。それよりも、先にもう私たちには端倪すべからざるところの神の御意が働いていたということ。

そういうように、パウロはハッキリと神の素晴らしい計画というものを言っている。創造から終末に至るまでの神の計画がある。しかし、それは物理の世界ではないから、せっかく神さまは選んでも、捨てるかもしれないよ。

「神さまに選ばれたから、私はもう大丈夫だ」

なんて、冗談じゃない。そんなことしたら、どこかで、

「私はもうお前を捨てる」

となるかもしれない。我々は非常に平安であると同時に、また私たちは非常に危機的存在である。わかりますか。まあだんだん行きましょう。



●十字架の贖い

5 御意のままにイエス・キリストに由り愛をもて己が子となさんことを定め給えり。6 是^{いづく}その愛し^めみ給う者によりて我らに賜^めいたる恩恵^{ほまれ}の栄光に^{めぐみ}誉あらん為なり。

「賜^めいたる」という言葉は「恩恵^{めぐみ}」ということとほとんど同じような言葉です。

7 我らは彼にありて恩恵^{めぐみ}の富に^{したが}随い、

さきほど、「プロレーマ」という字が出てきましたが、この「富」という字もだいぶ出てくる。豊かき。非常に豊かなる恵みです。「恩恵の富にしたがい」というのは、「豊かなる恵みによつて」ということです。

その血によりて贖^{あがない}罪、すなわち罪の赦^{ゆるし}を得たり。

これが私たちの根底です。キリストの恵みの恵みたる一番どん底は、これは何といつても、私たちを根底から——自我というやつが罪なんだから——私たちはそいつを本当にすつ飛ばされる。

「それはみんな心配要らん。私はみんなこれを十字架で引き受けた」

と。この十字架の贖いというものを観念で受けとつては、いつまでたつてもダメです。時々、何か自分が「あつ失敗した。これはいけない」というときに、その時に深く十字架を冥想しなさい。十字架のキリストを祈りの対象としなくては。その時その時ごとに深くなってくる。私の体験はそうです。私は何か躓いたり転んだりした時には、十字架です。それで深められていく。そして、贖いがいかに無条件にありがたいかを受けていく。これは自分でた言い聞かせるのではない。私はそうでなければもうやりきれんから。それで、十字架の贖いが深くなると、それが本当に自分が無くなるところの、私の無い無私の世界に入られていくわけです。

「あるがままでいい」

と私は皆さんに言います。あるがままでよろしい。無私に自分でなろうなんて、そんなむしのいいことはないよと。それはダメなんだ。あるがままでいいが、そのあるがままをどこへ持つていくかというところ、十字架に持つていった、あるがままの姿なんです。十字架に持つていったところのあるがままの姿にこの無私の世界が開示してくる。これは真剣にやらなければダメです。これはいわゆる熱心ではない。もう「ざるを得ない」ところの事態なんです。この「ざるを得ない」事態に自分が投げかけていく。そうすると、このキリストの十字架によつて、あるがままでこの無私の世界に入れられていく。これが恵みの土台です。

●御意の奥義

8 神は我らに諸般^{もろもろ}の智慧と聡明^{さとさき}とを与えてその恩恵^{めぐみ}を充^みしめ、



パウロという人は非常に多角的にものを見ているひとです。そして、多角的に見ながら、ちゃんと中心をつかめている人ですから。これは凄い人ですよ。福音におけるところの「諸々の智慧を与えて、その恵みを満たしめ」と。

9 御意の奥義を御意のままに示し給えり。

「御意の奥義」とは何ですか。「奥義」というのは「ミステリオン」という字です。一番神秘的な御意。御意の奥義、それを御意のままに示し給えりと。何ものによっても制約されない。御意の奥義というのは、もしその内容を言うならば、もちろん一言でいうならば、キリストです。そして、御意の奥義は、この贖罪と復活の事態です。使徒たちの伝道の一番中心となっていたものは何かというと、実は復活のキリストなんです。もう使徒行伝をお読みになっても分かるとおり。

「私たちはこの甦りの

「甦り」というのは「息を吹き返した」ということではない。

もの凄い霊的な実在であるキリスト。霊的実在であるところのこのキリスト、そのれの証人だ」

と。けれども、彼らがその証人として本当に立つことのできたのは、ただ復活のキリストにでつくわしたただけではまだダメです。その証人となって本当に立つことのできたのは、その同じ質の生命が自分たちの中に入ってきてから、できたんです。それは何か。聖霊です。でありますので、この聖霊が入ってきてから、初めて彼らは、甦りのキリストがいかに本ものであるか、事実中の事実であるかということの、この証人である。

「証人」ということは、言葉で証することが証人ではない。この「証人」という字は「殉教」という言葉と同じ字ですから。殉道者と私は言いたい。道に殉ずる者。キリストという道に殉ずる者。我々はこの殉道者である。「私は教えなり」とはキリストは言わなかった。

「我は道なり」

と言われた。「道」というのは私たち東洋人には非常に親しい言葉です。東洋の思想にはこの「道」というのが非常に大事なんだ。キリストが「道」と言ったときに、もう東洋のいいものをグーッとキリストは言ってくださっている。「我は道なり」と。まだ老子の説明では何か漠然としている。老子は凄いけれども、しかし、キリストはもうひとつ上のハッキリした、「我は道なり」と言う。誰が本当に、「我は道なり」と言いましたか。神の現象体でなければ、「我は道なり」なんてことは言えない。

これは、十字架され、贖罪し、そして墓を蹴破つて、キリストの義が勝った。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし」

と。「この義は棄てられてはいかん」と。この義が現れたのは生命です。キリストの愛は十字架に現れたが、キリストの義は甦りにおいてハッキリと現れた。神の義は、この甦りににおいてハッキリと、キリストの実存の勝利がハッキリとここに証しせられた。キリストの



実存は十字架では敗北ですよ。もの凄い敗北の姿をとった。しかしながら、「なぜ棄てたか」と。

「しかし、これはあなたは知ってます」
と、でも、

「なぜ、棄てたか」

と言わなければならないです、キリストは。

「乾坤けんこんを貫くところの神の義が倒れてたまるか」

ということですよ、「なぜ、棄てたか」ということは。

「この義が立つためには、どうぞ、あなたがその義を証明してください。それは私が本当に霊の生命として現れることではないですか」

と。神さまはそれをなさった。この十字架においてもちろん神の義と愛は現れましたが、特にパウロは別なところで、

「その復活よみがえりにおいて神の義が現れた」

と書いてある。キリストの義。そういうのがこの「奥義」です。これが「御意の奥義」。それを御意のままになさった。それが誰もわからん。

●万象帰主

それだから、この第1章10節がひとつの焦点である。即ち、

¹⁰即ち時満ちて経綸けいりんにしたがい、

「経綸」というのはおもしろい言葉だ。これは英語でいうと、「スチュワードシップ」(stewardship)という言葉で、「取り計らい」です。神さまの時が、カイロスが満ちまして、そして、経綸にしたがい、神の深い取り計らいによりまして、

天に在るもの、地にあるものを悉ことごとくとくキリストに在りて一つに帰せしめ給う。

これ自ら定め給いし所なり。

と。今日ここに書いた、「万象帰主」というのはこの10節から取ったわけです。一切のもの、天上天下の一切のものはキリストにあつて一つに帰する。主に帰する。

世界にいろいろな宗教があります。私も少し宗教の本をいろいろ読みつつありますけれども。おもしろいですね。インチキでないもの、とにかくまことのものは何でも読めますよ。

「キリスト教でなければいかん。仏教はダメだ。イスラム教はダメだ。ヒンズー教はダメだ」

なんてなことは言わない。いろいろ素晴らしい真理がそこらにこぼれている。それではみんないいところを取り合わせて一つのものをつくろうか。決して然らず。「キリスト教でなければダメだ」なんていうキリスト教は、他のものと比較しているようなキリスト教でね、そんなキリストはまだ本ものではない。



私たちのこのキリスト道^{みち}というのは一切のものを包摂^{くわくえつ}してしまう。何でもいいよと。全部、それが偽りでない限り、みんな福音の傘下に入ってしまう。それがエペソ書なんです。エペソ書というものは一切を包括している。パウロというやつはもの凄^{すご}いですね。

「神の恵みはいと高し、いと広し、いと深し」

という讃美歌があるが、もう広大無辺です。この10節です。

「¹⁰即ち時満ちて^{けいりん}経綸^{けいりん}にしたがい、天に在るもの、地にあるものを悉^{ことごと}くキリストに在りて一つに帰せしめ給う」

とは、なんと雄大な壮大な言葉か。

今の青年はいつたい何を問題にしているか。ソ連がチェコに武力進出をしてみたり。まあしかし、皆さん本当にキリストと一つになってきたら、地上のどんな恐ろしいことも驚かなくなってくるわけです。もちろん、私たちは十分な関心は持たなくてはいけません。けれども、それに吞まれることはなくなる。青年諸君は大いに経済も政治も法律も何でもやってください。何でも、社会問題でも大いに。それぞれの学問を大いにやっってください。しかし、その奥に、やるものは人間ですから、本当の意味における人間回復をしなければ、これは始まらない。私たちはこの二泊三日で——ちようどキリストの甦^{よみがえ}りみたいなものだ——まず十字架されて、それから帰^{かへ}りには復活して帰^{かへ}って行く。

そういう一切の、天上天下一切のものが主に、キリストに帰する。そういうキリストというものを本当にキリストとしているか。どんな宗教も、どんな真理も、一番根底にはこのキリストを持った人でなければ、それが本当につかめない

本当に根底にそういう人間がいてもらわなければ、地上はどんなに「平和、平和」なんて言ったって、決して平和にはならない。また、私たちがどんなにこれをつかんでも、それで世界に平和がくるとは思いません。これは聖書が言うとおり、いつか大カタストローフェ(破局)が来てしまつて、ひっくり返るでしょう。けれども、神の国は、にもかかわらず、そのような希望を持つて生きる人によつて立てられていくという約束。だから、現状がどうひっくり返ろうが、我々は行くべき歩き方をしていく。その歩き方の根底は何であるか。それは地上を超越^{こえ}したものである。この、

「神は万^{よろず}のものに超^こえ、主は万象に貫^{くわん}在^{ざい}し、聖霊は万事に内^{ない}在^{ざい}したもう」

と、これはパウロの言葉を私がちよつと変えたんだ。ひどい野郎だなと思うかもしれないが、パウロは全部これは、

「神は超^こえ、神は貫^{くわん}在^{ざい}し、神は内^{ない}在^{ざい}する」

と、エペソ書に書いてある。けれども、パウロのその意は実は、この三位一体の神さまをちゃんと言っているわけです。パウロにおいては、「神」と言おうが、「キリスト」と言おうが、「聖霊」と言おうが、これは離^{はな}れすることができない。パウロという人はそれだけの凄^{すご}い構造を實質的にしっかり捕まえている、捕まえられてしまった人です。



あなた方は何かものを言うときに、ひとつのことをグーッと行って差し支えないよ。けれども、その奥にちゃんと凄いものがある。大学の講義も、2時間の講義の奥には10時間の内容が隠れている。そういうのが本当の講義というものです。

●聖霊の人

11我らは凡ての事を御意の思慮のままに行いたもう者の御旨によりて預じめ定められ、

これは波状的に同じようなことを言っているでしょ。

キリストに在りて神の産業と為られたり。

神の働くところの産業内容とされたということ。「産業」とは妙な言葉ですけど。

12これ夙よりキリストに希望を置きし我らが神の栄光の誉とならん為なり。

13汝等もキリストに在りて真の言、すなわち汝らの救の福音をきき、

「真言」というのと「救の福音」とは同じことです。

彼を信じて約束の聖霊にて印せられたり。

はい、今度は「聖霊」という言葉が出てきた。

「聖霊にて印せられたり」

とかね。いいですよ、それも。けれども、私たちは今度は、聖霊の人となりましょう。聖霊の人。聖霊が主体となっているところの、そういうのを化しているところの人です。「彼を信じて」というのは、彼を現実に受けとって、そして、「約束の」——それは既に神さまが、キリストが、「お前たちにやるよ」と約束されたところの——その「聖霊でもって印せられた」というのは、もう押し手を押されたわけです。これは消えないんです。

「キャラクター」(character)という字がそういう字です。「性格はついに変わらず」という。誰でもみんな性格は変わらないんだよね。キュウリはナスにならない。じゃあしようがないなど。性格は変わらないけれども、その変わらない性格が——パウロというやつもなかなか我が強い男ですよ——だけれども、その我が今度は、自分の我ではなくなってしまう、同じその強さが神さまの、キリストの我になってしまった。キリストの我は決して消えはしない。これがキリストの我に変わってしまった。そこではもちろん変質しているんです。これは聖霊が来なければ、こういう変質はできない。ある程度の変更に近いものではないんだ。

にもかかわらず、まだあいかわらずの我というやつがいたりするよ。せっかく変質していると思ったらまだ妙なことがあるな、なんて。

「噫われ悩める人なるかな、この死の体より我を救わんものは誰ぞ」(ロマ7・

24)

と、パウロはローマ書7章で叫んでいる。どうにもならんと。けれども、「汝なるがゆえに」、



「我らの主イエス・キリストに頼りて神に感謝す」(ロマ7・25)

といって、今度は8章にきたら、もの凄いパウロです。7章と8章とは全然違ったパウロなんだが、ただ時間的に違うのではない。そういう矛盾構造を持っている。矛盾構造を持っているが、しかし、この8章のパウロが勝つんです。決定的な勝利をしているわけです。これはもう天上でもってキリストの姿に化するパウロであります。そういったような意味におけるところの変質と変向——向きが変わってしまう——その変向をしている。これは聖霊によって印せられていると、聖霊の人というものは確かにそういうものです。

そうでない人は、立派な人がいますよ、「ああ、あの人は立派だな」と。けれども、どんなにその人が立派であって、真実であって、模範的な人格者であっても、どうにもならん。その人によって私は自分がどうかなるなんて思わないね。けれども、

「あいつは何かしょうがない野郎だな。けれども、あそこに光っているものは本ものだ。その本ものはあいつのものではない。私はその本ものにぶつかって、『そうだっ』といって行く」

という、そういったものを私たち一人びとりが持たなくては。聖霊の人は、聖霊の人となつたから、

「あれは聖霊の人のくせに、あんなことをしやがって。あの聖霊はインチキだ」なんて、そうじゃないんです。これはパウロのローマ書7章と8章と同じように。

「ああ、あれは聖霊の人なんだが、生れつきこういう癖があって、どうもかわいそうだな。仕方がない。いいよ。しかし、あの戦いながら、聖霊の人としての彼が勝っていく。これは本当に神・キリストの救いである」

と。そういうのが私たちの福音の気合なんです。

●聖霊にて印せられた

昔どうだったからどうだ、なんてことはキリストは仰らない。私たちはみんな五十歩百歩です。問題は、いつも常に新たに自分を乗り越えてこのキリストに向っていくか。そうではなくて、自分というものをだんだん大事にして、自分というものを充実させていこうと、そういう立派な人になるか。

「真実」なんていう言葉も嫌だね、「真実、真実」と言われると。「あいつは少し真実が足りないな」と、すぐそういうことを言う。藤井先生が「真実、真実」と仰った。藤井先生の気持は分かる。けれども、「真実、真実」といって、人間の側のある真実を何ものかにすると、これがパリサイになる。

「もう真実もヘツタクレもない」

と、自分を投げ出す。投げ出されている姿が、あるがままの姿が投げ出されて平伏す——私は「平伏し」とか「投げ出し」とか言いたくてしょうがない——この平伏し、投げ出



しが、もし「真実」という言葉でいうならば、一番深い真実だと思う。人間はそれ自体が救われるようなら、真実も誠実もいいでしょう。「それでは、俺はひとつ大いにずる賢くやろうかな」なんて(笑)。そうじゃないよ。そういうことは違うんです。まあ、ずる賢くやつてごらんない、それでいいかどうか。

私たちがキリストの霊で貫かれていくところの、何とも説明できないところの——「本もの」と言いますかね、「真実」というよりも——この本ものが本当に人をうつ。それは私心のない世界ですから。自分というものを認めてない。キリストがそう言ったから。

「私は何もできないじゃないか。私は何も教えないじゃないか。私はちつとも善くはないじゃないか」

と、神の子キリストが言っている。これがキリストの本当の真実。キリストの真^{まこと}というのは、神を真としているのがキリストの真なんです。

「^{まこと}霊と真とをもつて」

というのは、このいただいた真が真なんです。そうしたらば、ああもう何と空々漠々というか、本当に澄みきった空といえますか——晴天白日なんていう言葉があるけれども——本当の晴天白日の心というのは、これはキリストにぶつ飛ばされた心だよな。そのものの姿を見ると、ガラクタさ。ガラクタであるが、よく見たら、何もないという。そういうのがこのキリストの霊によって私たちが貫かれているところの事態なんです。これが破れかぶれ、破れ衣という。

「木喰の袈裟^{けさ}や衣は破れてもまだ本願は破れざりけり」

という。木喰の袈裟や衣はどんなに破れたダメな坊主であっても、この本願は破れなかったよと。パウロが、

「この土の器に宝を持っている。この宝は何ものとも代えることのできないキリス

トの霊でいざるぞ」

と言う。私たちは、この集会でこの聖霊の人、中心に本当に聖霊を持っている人、いや実に中心に聖霊が来て、聖霊化されていくところの人。これが原始力——もう水素爆弾より強い——この力を持ったなかつたら、この20世紀のあとの30年を乗り切ることができない。

私みたいな弱虫は、それでなければとても乗り切れません。皆さんは強いから、なくてもいいかもしれないけれども、私はダメです。私は生れつき弱虫だから。中学校のときに学芸会で教壇に立たされると足が震えてしまう、そういう弱虫。「性格は変わらない」というが、どこかにその弱虫が残っている。けれども、やせ我慢しなくてもよくなつてしまった。皆さんも、この御霊の権威といえますか、力といえますか、この御霊の権威、力が来たら、もう本当に

「ああ、パウロさん、そうです。そのとおりです!」
と仰るわけです。



これが、「聖霊にて印せられた」ということ。どこにその跡がありますかなんて、そうじゃないよ、この「印せられた」というのは。ハッキリと実質を持っていることです。聖霊の実質を持っている。聖霊の跡ではない。聖霊を本当に内に帯びているわけです。

●我は十字架に投げ出されてあり

¹⁴これは我々が受くべき**嗣業の保証**にして、**神に属けるものの贖われ、かつ**

神の栄光に誉あらん為なり。

聖霊が本来に来なければ、神の栄光は現れませんよ。キリストの栄光は現れない。我々がその体現者となるということは、体現しようなんて思わなくなつて、自然に成っていく。

「お前は、キリスト教はあまり感心しないな」

なんて言う親がいるよね。けれども、とうとうここへやって来た一人の女性がある。もう勝利です、ここへ来たら。周りがどんなにアンチ・キリストであろうとも。ここに乙女がいっぱいいますが、あなた方は、ジャンヌ・ダルクは素晴らしいなんて思ったって、質的にはジャンヌ・ダルク以上のひとにもうすぐなるんです、これを受けとれば。

「ヒットラーは大きな間違いをしている。ドイツは滅びますよ」

と、女預言者みたいな人がいた。「あの女はけしからん、殺してしまえ」と。使いが行って、ピストルで撃とうとしたけれども、その乙女を撃てない。聖霊の光でなにか神々しい存在に対して、発射できない。それで、「もう殺しました」なんてウソを言つて帰つて来たという話を聞いた。

どんな英雄であろうとも、ナポレオンなんていう素晴らしい英雄もとうとうセントヘレナでイエスの前には全く頭を下げてしまった。

「福音書は文字ではなかった。これは活ける生命のものであった」

と、あのヒルティが引用している。私はあそこを読んだときに、ナポレオンというやつも、悟った瞬間に——ちょうど、最期の十字架の片一方の盗賊みたいに——浮かび上がったかもしれない。あれで本当に悔改めたらね。しかし、さすがにそのことの感ぜられたナポレオンですよ。

それでなかったならば、「キリストを信ずる」とか何とか言つたって、ダメですよ。キリストの霊と本当に一つになることです。さつきから私は「ふところ」と言つたでしょ。ヨハネ伝が私は大好きなのは、「**懐**」という言葉があるから。キリストは神の懐の人であつた。私たちはキリストの懐の人である。ということとは、本当にキリストの霊を宿しているもの。

これは無条件にです。さつきからお話しているとおり、無条件の現実になる。直ちになるけれども、「ああ、そうですか」と思ったって、これは成りませんよ。物理の世界とは違うんだから。これは本当に自分を投げ出さなくては。「いや、投げ出せません」ではない。



「投げ出されているではないですか」

と言いたい。十字架に投げ出されているではないですか。キリストは、

「お前をもう十字架に私は受けとってしまったのではないか。なぜ『投げ出されない』なんて躊躇ちゅうちよしているのか。ちゃんとここに私と一緒に投げ出されているじゃないか」

と言う。

「われキリストと共に十字架に投げ出されており。もはや私は生きていない」

と、パウロは言った。パウロは自分の勇気で投げ出したのではなかった。

「私は投げだされてあり。もはや我生くるにあらず。キリストの御霊わが内にありたもう。これをいかんせん。全世界の人が何と言おうと、御霊のキリストわがうちにいたもう。それは、十字架に投げだされていることに気がついたその瞬間に來てしまった」

と、こういうわけです。

もう自分がどうであろうと、将来どうなろうと、そんなことを自分なんてものを見る余地がなくなってしまった。もうそこで御霊に——キリストに酔える人となるとはそのことです——包まれる。そうしたら本当に、なんとこれはありがたいことか。

●永遠の生命

18 汝らの心の眼を明かにし、神の召めしにかかわる望のぞみと、聖徒にある神の嗣業しぎようの栄光の富と、

ここにも「栄光の富」という言葉がある。神の豊かなる栄光。さきほどから、「充滿、充滿」と言ったが、今度は「豊かさ、豊富さ」という。この豊富なる栄光というものは、聖霊は火であると同時に光でありますから。

19 神の大能の勢威いきおいの活動はたらきによりて信ずる我らに対する能力ちからの極めて大おおなるとを知らしめ給わんことを願う。

私たちは、

「生れつきの才能がどうである、こうである。どれだけのことができる、できない」

と思う。それはみんないわゆる「ガベ」(与えられたもの)だから仕方がないよ。私に絵を描かそうとしたって、絵は書けないんだね、いくら聖霊受けたって。私に民法を語れなんて言ったってダメなんだ。ひとつも知らない。テーブルセンターを編めと言ったって編めない。

「聖霊があつたら、一切できるんだから、編んでごらん」

なんて言ったってダメなんだ。それは魔術だよ、そんなのは。

けれども、私たちの頂いているところの皆それぞれの特色がある。その頂いている特色、



賜つているところの賜物、これは質的にもの凄いものになっていく。量的にはどうでもいいですよ。質的にはもの凄いものになっていく。大根ひとつ切っても違う。あの人の切った千本大根はちがうなと。

「神の大能の勢威の活動^{いさお}によつて信ずる我らに対する能力^{ちから}の極めて大なることを知らしめ」

と。これはこの聖霊を受けますと、私たちには何かしらんが質的に、無限と云いたいような、無量と云いたいようなものがある。もちろん、我々は有限的です、量的には。量的には有限であります、質的には無限性がある。

「永遠の生命」というのはそういうこと。また、私たちの活力というものは、量的には限界があつても、質的には無限的なものを持つてゐる。いいですか。そういう人間に皆さんはなる。これは不死のひと、もう死なないひとなんです。永遠の生命。聖霊は永遠の生命をもたらしところのものですから。私は平伏しては進んで行くんです、ジグザグに。そして、だんだんキリストの方に行こうと思う。

●死んでも死なない生命

20 神はその大能をキリストのうちに働かせて、之を死人の中より甦えらせ、

天の所にて己の右に坐せしめ、

キリストは死人の甦りの「最先^{いよさき}」と成りたもうた。これはいわゆる「プロトス」といわれる言葉ですけれども。このキリストが最先^{いよさき}に罪と死とに打ち勝つて、そして実証された。私たちは、二千年たとうが三千年たとうが、キリストに直結して、この甦りの実質を今、もう現に持つてゐる。私たちはいつか死ぬかもしれない。死ぬでしょうよ。みんな死ぬけれども、しかし、

「私たちは死んでも死なない」

とキリストがヨハネ伝で言つておられる。死んでも死なない。世界がどんなに惨憺^{さんたん}たる戦争になろうとも死なない。それだけの聖霊の器とならなかつたらば、この30年は乗り切れませんよと預言してもいい。これは冗談じゃない。時々、本当に死を冥想する。

神さまがまだ私たちに御用があるとならば、どんな危機をも突破して救つてくださる。

「よし、お前の使命は終つた」

というなら、私たちの思わない時にスツと向うに行かなくてはならないでしょう。とにかく、我々は、この死んでも死なない生命を持つてゐる。そして地上にあるかぎりには、本当にお互いにキリストの証人となる。

第1章、2章あたりはまずこの「個」、個人ということ。あなた方は一人の個としての徹底的な生命の世界に入らなくてはいいかん。もう左顧右眄^{さこうべん}はいらん。「あの人がどうだ、この人がどうだ」と、そんなことはいらん。自分自身の問題として、



「私はもう本当にキリストでなければどうにもなりません」

「天上天下、汝のほかに慕うものなし」

と。あなた方は恋人があるかもしれない。けれども、恋人とも、結婚を約束している人もちがうんだと、それだけの一切の相対的な世界を乗り越えたところのものをここに持つていなくては。

ヨハネ伝の一番終りで、ペテロが聞かれた。

「ペテロよ、なんじ我を愛するか」

と、三度まで聞かれた。ペテロは答えられない。まあ一応答えたけれども。あれは本当の答えではない。あれは聖霊が来てなければ本当に答えられないんだ。

私たちは、

「なんじ我を愛するか」

と言われたときに、もうただ平伏して、わがうちなる聖霊が、

「主さまー」

と叫ぶ。聖霊がこのキリストに「主さま」と叫ぶ。キリストにキリストの霊が答えるような、そういうところで本当に、

「あなたを愛さないで誰を愛しますか。私の存在はどうかなってしまいます」
というのが私たちの信仰告白です。

信仰とは、愛することのほかの何ものでもない。キリストの愛をもって答えることのほか何ものでもない。そうしたらば、このキリストの愛は霊の力ある愛ですから。そこらの愛とはちがうんだから、キリストの愛は。もう何ものよりも力強い愛です、キリストの愛は。全世界を背負っている愛だもの。愛なんていう普通の言葉では本当は表せないんだ。キリストの愛は本当は別の言葉を使わなければいけない。

●霊界の王者

そういうキリストの生命。それで、

21 もろもろの政治・^{まつりごと}権威・能力・支配、また^{ただ}音に此の世のみならず、来らんとする世にも^{すべ}称うる凡ての名の上に置き、

このエペソ書というのはいかに凄い超越的な絶対次元のキリストの権威をうたっているところ。一人の宗教的天才とか、そんなこととは違う。ナザレのイエスに現れたところのこの天上にあるキリストは本当に王者です。霊界の本当の王者です。地上でどんな大國が何をしようが、そんなこととはもう桁のちがった世界です。人類はこれを嘲り、これに気がつかない。20世紀後半の文明国もこのエペソ書に、エペソ、ピリピ、コロサイに言われているこういったキリストからは、今のクリスチャンもはるかに次元が低くなっている。ただ私たちの存在の鍵をにぎり、本当に救いに引っくり返すところのキリストは、そういう



う一切の次元を越えたところの素晴らしい王者であるという、この二つの面を持っているわけです。

今、私は1章、2章で「個」と言いましたが、その個を本当に徹底的に救済し貫いてくるキリストが、そういう一切の次元を越えたところの霊界の王者である。すべてを支配しているところのもの。そういうキリストという、まあなんとパウロの信仰の構造の壮大なることか。今は、宇宙船とか何とか言っているけれども、そんなことどころではない。だから、こういうところを読んでいて、私は解釈にも何もなりはしないですよ、その壮大さに圧倒されてしまつて。

そういう壮大にして大能なる神・キリストと同質なものがこの小さな個の中に宿つてくるから、我々の気宇が壮大になる。宿るから。何がどうなつたつて、世界がどう引っくり返つたつて大丈夫だ。神の国はそんなことで揺るがない。必ず歴史の終りには来るんだと。そういう図太い魂に私たちはなる。そして、この世の問題をいい加減にするんじゃないですよ、もちろん。

●私はリンゴの苗を植える

昔の坊さんは、禅宗の坊さんの所へ道をたずねて来ると、その青年に、「そうか、お前はまず便所掃除をしろ」と。そこから始まる。地道なところから始まる。それが積み重なつて何かになるというの。本当の道はそういった地道なところから始まる。それが積み重なつて何かになるというのではないけれども、そういうことと、この壮大なる気宇を持つていることが矛盾しない構造になっている。私たちは決していわゆる道徳的実践そのものを問題にはしない。けれども、本当にキリストの霊の世界を持つものは、これは素晴らしい霊法の世界ですから、素晴らしい霊法の世界では、いわゆる道徳よりもっと地道な歩き方ができるようになる。本当にそこにおいて喜びを感じ、そこにおいて本当に世界を——偉そうな事件よりも、人に隠れたひとつの事柄が——実は神の国を建設している。

マルチン・ルターが、

「明日、世界がひっくり返るとしたら、お前はどうするか」と聞かれたら、

「私はリンゴの苗を植える」

と答えた。世界が引っくり返るのに、リンゴの苗を植えて何になるかということでしょう。しかし、そこがまたルターのいいところです。

「リンゴの苗を植える。地上とにかくこれから地をならす。明日、引っくり返つてもいい。それが本当の私たちの歩き方なんだ」

と。神の国を本当にうちに持つているものは、その結果いかにかわらず、本当の実存が自然に展開してくるようなものです。いわゆる霊的な人がなにか浮いてしまつて、三昧



になったらダメですよ。平伏しの魂は地道に本当にやっていく。霊的行為とは何か。雑巾掛けをすることなり。これが本当の世界なんです。

大学は学問においては中立のところである。研究はいい、議論はいい。しかし、それは社会に出てから大いに実践しろ。

「よろずのことに時あり」

という。そういうことが、もう小学校から大学に至るまでなんと日本の教育はおかしなことになってしまっているか。小さいときから「社会、社会」と言ってみたり。もう救い難き状態ですよ、このまま行ったら、日本という国は。単なる哲学も、単なる道德もダメ。もうこの福音のほかにない。その福音が観念になってみたり、単なるパリスイ的ないわゆる道德教になってみたり。とにかく、パウロが持っているこの健全な構造というものが、パウロの文字が、決して頭でない本当に霊の力と知恵と実存に満ちたものであるということです。

●時が来たら私はやるぞ

若い方々は、今は青年が世界で騒ぎだしているが、あんなものは決してよくはないけれども、今度は本当に人間回復とか、人間革命を起こす青年が起きてこないでどうするか。本当に聖霊の青年が出てこなくては。第一、キリスト自身が青年であります。原始福音のキリスト教の運動にたずさわった使徒たちはみんな青年ですよ、パウロにしたってみんな。青年が動かした。明治初年のあれだっけそうですよ。大体、20、30歳の人たちです。「私は40だからダメだ」と、そんなことは思う必要はない。私は60歳でもやるよ。私は永遠の青年だから。「まあ、先生、そんなこと言っただけダメだよ」なんて。それは、あるところはダメだけれども、あるところは決して青年に負けない。

青年諸君が今こそこの聖霊を——老いたるも若きも——特に青年諸君は、この新しき、今こそこの福音をいただいて、

「とにかく、時が来たら私はやるぞ」

と。そのためには本当に聖霊の人となっていないければ、神さまが招集した時に立ち上がれないから。自分で立ち上がったってダメだよ。神さまは招集する時期があるんだから。その時までには本当に深く深く聖霊の人となり、実力を——実力というのは存在そのものの実力を——ひとつやってくださいよ。もうそういうカイロスに来ている。今は、特別集会というのは本当に今度は特別なんだ。今までの特別と違うんだ、この第15回は。

22 万^{よろず}の物をその足の下に服^{した}わせ、彼を万の物の上に首^{かしら}として教会に与え給えり。

これはヘブル書に出てますから。これからだんだん教会の問題が出てきますけれども。

23 この教会は彼の体^{からだ}にして、万の物をもて万の物に満し給う者の



キリストの、

満つる所なり。

この第1章には、10節と19節とこの23節の三つの山がある。もうひとつその中間に13節も、ある意味において大事ですけれども、特にこの三つの山が大きな山です。力強い。

「教会」という言葉は——藤井先生は「召団」という言葉を使ったが、やはりなかなかいい言葉だと私は思っている——召されたる団体であります。私は「武蔵野福音集会」なんて言っているけれども、「会」の字はあまり好きではない。前の「幕屋」(武蔵野幕屋)で結構ですよ。とにかく、召されたる団体、召団。これは私の先生の藤井先生が造った言葉だけれども、なかなかいいですよ。この召団は——教会だっていい——この教会は、エクレシヤは彼の体である。私たちは具体的な体を——みんな幽霊じゃないから——みんな体を持つ。この体を持っているが、これは霊と肉とが渾然たるものです。だから、体というのは要するに生命体ですよ。私たちは生命体です。私たちの生命体の一番奥には、中心はこの霊体というやつがある。聖霊をいだけば、もう霊体の核がちゃんと出来ている。聖霊の周りにはちゃんと霊的な質が、具体的なものがあるに相違ない。本当に聖霊に燃えて、グーッと冥想したらば、癌なんか消えてしまわないかと思っているんだがね。あなた方、癌の傾向があったら、聖霊で燃やして焼きつくしてしまいなさいよ。

●我とキリストとは一つなり

「この教会は彼の体にして、万の物をもて万の物に満たし給う者の満つる所なり」

と。実におもしろい言い方をしている。イエスというひとが、

「我を見しものは父を見しなり」

と。こんなことは絶対に他の人には言えない。「私を見たものは父を見たもの」と。

「私は何もできない。何も言えない。ちっとも善くない」

と言うイエスが、「我を見しものは父を見しなり」と。

「我を見しものは父を見しなり。我と父とは一つなり」

これが充滿ということですよ。このエペソ書に「一つ」という言葉がさんざん出てくる。私がこの「一」という字を黒板に書いたら、あなた方はもうビリビリとこなくてはウソなんだ、本当は。霊動するくらいにならなくては。これに極まる。文字中の文字はこれなんです。そういう、

「我と父とは一つなり」

と。私たちは、

「我とキリストとは一つなり」

ということになる。それを使徒たちはやった。ペテロが、ヨハネが、



「我を見よ」

と言ったでしょ。あの「我を見よ」と言った時の「我」はもはや単なる我でない。キリストの我、キリストにある我です。

「わがうちなるキリストを見よ」

ということですよ、あの「我を見よ」とは。彼らはそんな分析した言い方はしない。もう質的に一つになってしまっているから。御霊が充滿して宿ってしまっているものだから、「我を見よ」と。

「我を見よ。わがうちにあるものを汝に与う」

と言って、跛者を立たせた。皆さん、「あれはペテロやヨハネはできたけれども、私にはできない」なんてことはひとつもない。皆さんはいざという時にこれができる。何ものでもないんです、私たちは。けれども本当に、

「主さまー！」

と腸はらわたの底から「主さま」と呼んでごらん。そうしたら、その時にその次の言葉は、「我を見よ」になれるから。

「あなたを信ずるとなったら、もう私の中に来てくださいって、どうにもならん」

と。だから、「聖霊とは何ぞや」なんて、あんな本は読まない方がいい。あんなものを読むと、かえって迷ってしまうから。一番本ものは一番簡単なんです。仏教だってそうでしょ。

「南無阿弥陀仏」

「南無妙法蓮華経」

という、あの六字と七字。あれに浄土真宗の一切と日蓮宗の一切がかかっている。

「主イエス・キリスト」

に一切が福音はかかってしまっている。「主よ」と。キリストは「父よ」である。

「父よ、アッバー」

と、そういう一語に。もう言葉じゃないです、これは。全身の響きです。全身の告白。それは呼んだ瞬間にもう聖霊の世界、聖霊の響きです。

「なんとそれはたやすい簡単なことだったか。何を私は今までゴタゴタしてたんだろう」

と、皆さんお思いになる。それでいいんです。簡単明瞭。

●平伏しの空っぽ

キリストは万象に貫よろず在あらしておられる。万のものに貫在よろずしている。

「石を上げてみる。そこに我在り」

なんていう、キリストの言葉が外典の中にある。ひとつの花にも神の栄光をご覧になる。キリストの霊は遍在あらしている。キリストは天界に、霊界に超在あらして、「神の右に在る」とい



う表現で言われていると同時に、一切を貫いている。

ひとたびナザレのイエスとして具体的に現れたキリストは今度は復活体となって、昇天されたキリストは霊のキリストとして自由自在ですから。そんなことは分析して考えることはひとつもいらん。そこに一切を支配しているところのキリストの霊の充満がある。

キリストの念おもいというのは、御霊の念というものはもの凄い力を持っている。

「既に癒えたり」

と言われたら、ちゃんと何キロか向うのやつが治ってしまう。キリストの信というものはそういったもの凄い念である。それが本願である。私たちの祈りの質がそういうことです。

呪いというのは嫌なことですから。しかし、とにかく悪霊も力を持っていますから。悪霊は力を持っているけれども、皆さん、キリストの霊は最高の霊ですから、何も恐いことではない。恐いものはひとつもない。幽霊が出てこようが、何が出てこようが、ひとつも恐いことはない。「主さまー」と言って祈り入る。幽霊が出て来ても恐がらないで、

「どうしましたか、あなたは？」

と幽霊に言ってみてくださいよ。

私たちは常時そのような——ハッと気がついたらもう聖霊の中に——自分の中に聖霊がいたと。ハッと気がついたら空気を吸っているのが分かったというような具合に。

パウロが別なところで、

「御霊を消すな」

と言った。御霊は火だから。御霊は——テサロニケかどこかに書いてある——消えないから。平伏ひれふしの魂であれば、次の瞬間には直ちに、この御霊の世界は常にここに来ていたわけ。

この平伏しの魂が一番、権威を持つものだから不思議ですよ。「我こそは」と思っているのはダメになってしまふ。いいですか、いわゆる霊的に恵まれば恵まれるほど平伏しにならなければダメですよ。必ずダメになることは分かっているから。キリストはもの凄い霊的に恵まれている方だが、いよいよ平伏しであった。

充満ということと空っぽということが同じなんです。「自分が充満しよう充満しよう」なんて思ったり、「私はもう充満しているからいい」なんて思ったら、これはいかん。もう平伏しです。平伏しの空っぽ。空っぽだと思ったら満ちていたなんて。これは説明になりませんけれども。説明できませんけれども、それは体験していくよりか仕方がない。自動車の運転だって身体で覚えていかなったでしょうがない。いくら教本を読んだってダメなんだ。

何でも皆さんが、本当にこれは体験しなければダメだなということがあったらば、福音はいよいよもってそうだなということが分かっていただいたいわけだ。それを福音だけは頭で分かるうなんて思ったらとんでもない。

そういった、空っぽだと思っていたら、満ち満ちていたもの凄い充満の世界です。正直



今度は——空っぽなんて思わなくなっている——もううれしくてたまらないと。それでいい。そのうれしくてたまらないのは何がうれしいかといったら、自分の中にあるものが自分のものではなかった、これはキリストだったと。それだから、私自身は何かと思ったら空っぽだったという、それだけの話ですよ。

そういうようなのが、この第1章でもって徹底的にもの凄いキリストの世界です。もう説明にもならないような壮大なもの。ただ個に向ってももの凄い充滿を迫ってきているところのもの。そうしたらば、その個の中にその充滿の迫りがくると、これがグーッと広がって見えてくる。この充実、聖霊の充実、このキリストの満ち満ちているところの事態です。教会のことは今日は言いませんけれども、この群れの事態がだんだん分かってくる。

●一と全

それで、終りにゲーテさんの言葉をちよつと引いておきます。今日は、「万象帰主」と題しましたが、ゲーテの詩の中に、「一と全」というのがある。

「無際限の広大なるものの中に自分というものを、本当に在るということを実感しようと思ったならば、個というものが消えなくてはいかん。個をただ個として考えていたら、その本当の素晴らしいものが見えない。そういった現実においては、あらゆる厭^{いと}わしい煩^{わづら}わしいことはみんな消えてしまう。いわゆる熱っぽいところの願望^{いふ}だとか、荒々しい意欲だとかというようなものの代りに、また煩わしいところのいろいろな要求だとか、厳しいところのすべしすべからずというような世界の代りに、自分を本当に投げ出してしまふことが本当の楽しみである。

もうこれはかなり深い宗教的な境地ですね。

あるひとつの宇宙的な霊に、やって来てくれ、そして私の中に浸透してくれと。

私たちにとっては、これはキリストですよ。「キリストの霊よ、来たりたまえ」というのと同じことです。そして、浸透してくれと。

時代精神と葛藤するのが我々の……

我々は正にそういうところをキリストでもって越えた世界を持っている。成層圏的な世界を。このエペソ書はその成層圏的なものですから。それで時代精神なんていうものに勝てる。もうひとつ本当の世界を見ているから。

それで右に付き、左に付いたって、いつまでたってもダメですよ。たとえば、右派、左派なんて言って、今度は中央なんて言ったって、同じ次元の中央だったらダメなんです。もうひとつ上に立たなければ。上に立つと、右も左もちゃんと掌握できるような世界があるわけです。右の中にも善さがある。左の中にも善さがある。唯物論だって何だって。それぞれの善さというものを本当に掌握するのは、ここの中央じゃないんだよ、もうひとつ次元の違ったところ。そうしたら、これもみんなつかめるようになる。そういう「ヴェルト・



ゼーレ」（世界霊）という、私たちにとってはキリストの霊。パウロがその世界を持つている。ゲートルさんは、福音的な角度からものを言っていないけれども、しかし、そういったところを彼はつかんでいるから、そこでゲートルというやつはやっぱりでっかい。そして、その善き越えたものに本来に参与しているところの善き霊どもは、善き霊的な人物は、深くそれに関与して、最高のそういったことによく通じている人たちは導きながら行くのである。静かに行く。そして、一切をなし、また造っていったところのそのものへと、この善き霊どもは、そういった優れた霊どもは、その一切のものを造ったところのものへと

神さまのことです

そこへと進んで行く。」

という、非常に深淵なことを書いているところの詩がある。

とにかく、このエペソ書の凄さというものは、この聖霊というものはそういった壮大なものを持ち得るところのものです。学問の世界じゃないですよ、ここでパウロが言っているのは。いわゆる学問よりか凄い世界です。そういうようなものを本当に一人の乙女でも持ち得るんです。これは聖霊が一切に充滿し、一切を支配し、また本当に小さなところにしっかりと動いていくような、このキリストの霊。このキリストの霊を私たちがいただいて、万象がすべて主に帰する。すべての現象はこの主に帰して、主によって導かれ、主に帰していくところのそういった壮大な構造を第1章でうたっている。

「どうぞ、その力強いものが、充滿したものが、神の全能がこの小さなものの中に、質的には無限の質をもつて働いてください」

と、パウロが祈っている。壮大さと、それから小さなものにおける質的な無限さというものと、両方持ったことを言っているわけです。私はそういうようにこここのところを読まされるというわけです。

